

---

## 第 16 章 結婚騒動Ⅱ：1959 年（22 歳）

### 微かな変化の兆し

1959 年 11 月 11 日のことである。この日はフランスの重要な祝日で（訳注：第一次世界大戦の戦勝記念日）、アウレフでも記念祝典が開かれた。当時私たちは全員フランス国籍だった。当日は隊長夫妻や軍医夫妻の他にも、本土生まれの大勢のフランス人たちが参列していた。フランス人は皆、地元の人々に交じって楽しそうに見えた。彼らも、私とメサウダの結婚を知り、地元住民の間の人種差別の習慣に和解の兆しが表れたと喜んでくれた。祝典で隊長は次のように演説した。

「アルジェリアは間もなくフランスから独立するだろう。これは残念なことだと思う。私自身は、我々が分離するのに反対である。しかし、時が来れば、それに従うしかない。」

次に隊長は、多分私たちのことを言おうとしてのだと思うが、こう続けた。

「いずれにしても、当地の若者たちが、彼らの両親世代の因習である人種差別に立ち向かうなら、私は、私がこの地アウレフに居る限り、彼らを助けるため最善のことをするだろう。この因習は憎悪と不和しか生まず、人間の潜在的能力を害するばかりである。人種差別は不条理な憎悪の温床であり、そこからはもはや連帯感の元となる慈悲の心は生まれにくい。」

隊長の演説はさらに続いた。

「フランス本土では、この点に関する解放が進み、今日人種差別は撲滅された。しかし、かつて我々の祖先が、奴隷制の下、黒人に対して行ってきた所業を思い出すと、ただ恥じ入るばかりである。神の摂理の下に万人は平等であり、人種間に優劣は無い。今日ここで、黒人とアラブ人の婚姻を見ることになるとは、なんとという幸せだろう。こうした結婚からは、より健やかな子ども達が生まれ、その子らが代々の因習を消滅させて行くだろう。」

### 二家族の和解

それから数カ月が過ぎ、私達二つの家族の間に流れていた気まずさは、時の経過と共にすこしずつ薄らいでいったが、まだ完全に和解したとも言えなかった。ある日、ゼイン・エディヌ・ウアティク（Zin Eddine Ouatik）という賢者が、タマンラセットからの通り道にアウレフに立ち寄った。彼は、インサラールとタマンラセットを結ぶ街道の途中に位置するムーレイ・ラセンヌ（Moulay Lahcène）という所のザウイーア（訳注：巡礼者などが泊まるイスラムの集会所）の長で、地域の人々から尊敬される人物だった。なお、彼の父シディ・モハメッド・ウアティク（Sidi Mohammed Ouatik）は、私とメサウダの結婚の取り決め一枚噛んでいた。息子のウアティク師は、私とメサウダの家族の間の不和を知ると、仲裁を買って出てくれた。師は、私達の家族の和解には、神が望むことの真髓が隠されていると言った。そして、慎重に、しかし大胆に、老練な外交官のように二家族の間を行き来しながら、説得を繰り返した。師は、次のように言った。

「この結婚の邪魔をする者は、必ず神の怒りに触れるだろう。神を信じ、その信仰に嘘が

ないならば、その人の心はもっと素直なはずである。想像してみるがいい。これは、聖人が人助けをしようとするのを邪魔するような行為である。神は、そういう人間には、その行為の代償として直ちに罰を下されるが、あなたは怖くはないのか？」

ある日、私のところにウアティク師から使いがあった。夕暮れ前に私の家で会いたいとのことだった。私とメサウダは依然私の両親の所において、私たちの新居は無人のままだったが、私はこの申し出を受け入れた。師は約束の時間通りにやってきたが、まず一緒に日没の礼拝を済まそうと言った。

「ここはあなたの家ですから、あなたが礼拝を取り仕切ってください。」

私は、もし私があなたより年上ならそうするでしょうが、実際には私の方が年少なので、どうぞあなたが仕切って下さいと答えた。ウアティク師は、半歩私の前に出て、エル・マグレブ（日没）の祈りを一節ずつ唱え、私はそれに唱和した。礼拝が終わると師は立ち上がり、両手を天に掲げ、自分がこの仲裁を成功させられるようお助け下さいと、神に加護を祈った。次に私に向き直り、こう言った。

「さっきは、お気遣いありがとうございます。私を尊重してくれて嬉しく思いますよ。神はきっと、あなたに報い、幸せで安定した人生を賜るでしょう。あなたの家庭は沢山の子供に恵まれ栄えるに違いありません。もし、ここで私の言ったことが現実にならなかつたら、私が死んだ時私の墓を燃やしたって構いませんよ。」

これに対し私は、どちらが先に人生を終えるかは神のみぞ知るところでしょう、と応えた。

「確かにそうですね。しかし、目標のもう間近にいる人には、これぐらい大げさなことを言ってもいいのですよ。」とウアティク師は言った。

師は次に、私の父の家まで一緒に行こうと言った。前述のように、父の家には私とメサウダが身を寄せており、また当時父は二番目の妻を娶っていたので、大所帯だった。父の二番目の妻は、父の母方の伯父の娘、つまり父にとっては従姉妹だったが、この結婚からは娘が一人生まれた。この母親違いの妹は名をメバルカといった。この頃私の母は常々、私が新居を構えたら、そっちの方に住みたいとこぼしていた。しかし、メサウダも私も、出来るだけ長く父の家にいる方が、周囲からの誹謗中傷も下火になるだろうと考えていた。ウアティク師は父の家に着くと、自分がメサウダを彼女の家族に会わせに連れて行こうと提案した。父は一も二もなく、この申し出を承諾し、こう言った。

「どう感謝したらいいか分かりません。あなたのお申し出は、まさに偉大なる神と、預言者モハンマドの御心にかなう尊い行為です。」

「あなたが善良な人だと思ったから、そうしたまでのこと。あなたは正しい道を進んでいます。常に神はあなたと伴にいると信じなさい。」

師は今度はメサウダに向かって、さあ一緒に家に行こう、と言った。彼女は、さっと顔色を変え、黙ってしまった。それと察したウアティク師は、彼女を安心させようとして言った。「大丈夫。私が付いて行くのだからね。怖がらないで一緒に来なさい。」

メサウダの顔は見る間に明るくなった。彼女も内心この仲裁を喜んでいたに違いない。メサウダは、師の後について出て行った。二時間ほど後、夜遅くになってから、師はメサウ

ダを連れて帰って来た。二人の表情は、全てが上手くいったことを物語っていた。師はメサウダを祝福して言った。

「神はあなたと共にいる。神の恩恵によって、あなたはきっと幸せになり、模範的家庭の母となるだろう。」

師は私に向き直って言った。

「明日、彼女と一緒に彼女の兄の家に行きなさい。神はあなたたち二人を祝福されている。怖がらず言われた通りにしなさい。大丈夫、全て解決したよ。」

翌日の晩、私はメサウダを連れて出かけた。師の言葉通り、メサウダの家族は、私たち二人を、わが子の帰還のように微笑んで迎えてくれた。この日を境に、我々二家族の間では全てが上手く運び始めた。それどころかむしろ、双方の家族ともちょっと、私達夫婦をちやほやし過ぎるのではないかと感じるほどだった。双方の家族は互いに行き来するようになり、自然と信頼が醸成されていった。事態が収束したのを見て、メサウダと私は新居に移る決心をした。新しい家は、アウレフのウマナト地区にあり、双方の生家のちょうど中ほどに位置した。私の父の家から測るとわずか 200 メートルほどの場所であった。私たちは双方の生家を足しげく訪問した。

そうこうするうちメサウダが妊娠した。最初にそれと気づいたのは私の父だった。父は母に伝え、母はアイーシャ叔母さんに伝えた。当の本人のメサウダは、妊娠の経験がないこともあって、アイーシャ叔母から教えられた時、とても驚いたようだった。そしてやっとメサウダから私にニュースがもたらされた。

「私はまだ何も感じないんだけど、アイーシャ叔母さんが来て私が妊娠してるって言うのよ。叔母さんの言うことが本当だといいいんだけど。」

私は、結婚してからまだ三カ月で、それは不可能だと思ったが、黙っていた。いずれにしても時が満ちればはっきりする。しかし一か月後には、早くも噂は世間中に広まった。ある人は「子供は、子供の方から親のところに来るものだ。」といい、別のある者は「全ては神の決め賜うたことだ。」と言った。メサウダの妊娠は日に日に目に明らかになって行った。私達夫婦も、双方の家族も幸せで一杯だった。

### 独立闘争の波、シディ・ムハニ事件

私たちは新しい家で平穏で幸せな生活を送った。夜はよく、私の両親やメサウダの兄の家、それに友人たちの家へ行った。逆に彼らが私たちの新居を訪れることもあったが、そうした訪問客の中には、フランス人の友人たちも交じっていた。彼らは、密かにアルジェリアの独立のため働いてくれている同志だった。中でも最も熱心な協力者はジュアント (Jouando) 女史で、彼女はコンスタンチヌ出身のユダヤ人だった。(訳注: アウレフの小学校の先生。後出の資料によると、在任期間は 1956-58 年、1960-62 年。) 彼女こそ、この国での正義の実現の必要性を説き、私の心に同朋愛の息吹を吹き込んでくれた人物である。彼女は私に、政治とは何か、人民の解放とは何かを教えてくれた。ある日、フランス人の同士たちと夕食を囲んでいた時、まるで突然の雷のように一つの不幸なニュースが飛

び込んで来た。和やかだった会食の席は一瞬にして悲嘆の底に沈んだ。そこに居た全員が同じ悲しみを分かち合った。

その時私たちが受け取った知らせは、フォガレット・エズーア (Foggaret Ez'Zoua) の北方 30 キロのところにあるシディ・ムハニ (Sidi M'hanni) での戦闘に関するものだった。アルジェリアでは独立闘争が 1956 年に始まり、その後 3 年の間にその活動の範囲は国土全体に広まっていた。しかし、南部の沙漠地帯ではずっと平静が保たれていた。ムジャヒディン (訳注：元々はイスラムの教えのために闘う兵士の意。ここでは独立戦線の兵士。) 達は、軍資金を募るため地域住民に接触することはあっても、彼らを扇動して蜂起に加わせようとはしなかった。そもそも草も水もない荒野のサハラでは、すぐ飛行機から発見されてしまうので、マキ (訳注：反乱軍等の隠れ家) を設営するには無理があったのである。シディ・ムハニでの戦闘は、そうした頃に起きたフランス軍襲撃事件である。この事件では、はじめ反乱軍兵士三人がフランス軍部隊を襲い、通訳の中尉一人を含むフランス側兵士 7 名を殺害した。しかし、反乱軍兵士は数日後、追ってきたフランス軍部隊に、インサラールとエルゴレアの中間地点で掃討された。フランス軍兵士が殺された翌日、アウレフのムニエ (Meunier) 隊長は配下のハルキ (訳注：フランス駐留軍で働いた現地人兵士。独立後粛清の対象となり、彼らの家族までが差別を受けることになる。) を招集し、インサラールの東でフランス軍が襲われたことを発表した。この知らせに、それまで北部の優騒とは無縁であった南部の住民の間にも不安が走った。人々はフランス軍がなりふり構わず報復に出るのではと恐れたのである。



イメージ画像：インバルベルの村はずれの景観。確かに上空からは丸見えで、潜伏するには向かないでしょう。(2002 年訳者撮影)

その時の事件のあらまは以下の通りである。一人のスパイが反乱軍の動きをインサラーの軍当局に密告し、掃討のため一部隊が出動した。密告された三人のムジャヒディンは、ラクダでエルゴレアを目指して進んでいるところだった。彼らが昼食のため鍋を焚火にかけていると、遠くから車のエンジン音が聞こえた。何事かと思い彼らが双眼鏡で砂丘の彼方を探すと、敵が自分たちの方に向かって来るのが見えた。ラクダでジープを振り切るのは不可能だった。ムジャヒディンたちは、逃げるのを断念し、焚火の傍を離れ岩陰に隠れた。攻撃態勢を整え、逆に待伏せを仕掛けようとしたのだ。ジープは現場まで来たが、隠れているムジャヒディンには全く気付かないまま、焚火の側で停車した。車の中で一人の士官が立ち上がった。それは通訳の中尉だったが、ムジャヒディンの銃が放った最初の一発は彼の頭に命中した。戦闘が始まった。しかし、若く経験不足のハルキたちは直ぐ浮き足立ち、形勢不利に陥った。結局部隊は、車をその場に放り出し、我先にとフォガレ・エズーアへ向かって潰走した。反乱軍の方は後から悠々と出て行って、部隊が残っていた武器を回収し、車に火をかけた。ハルキの中に運悪く逃げ遅れた者がいて、この男はムジャヒディン達に焼殺しにされた。その後反乱軍の三人は、当初の目的地エルゴレアへ向かったが、しばらく進むと水が尽きてしまった。窮余の一策で、彼らはラクダを一頭屠り、胃の残留物を飲んで、その場をしのいだ。しかし、そうしている間にもフランス軍の側は反撃態勢を整え、ムジャヒディンのラクダの後を追った。状況は今度は反乱軍の側が俄然不利だった。反乱軍の三人は、あっという間にフランス軍の車両部隊に追いつかれ、射殺された。以上は、当地の幾つかの情報筋から聞いた話を総合したものである。話してくれた者の中には、襲撃されたフランス軍部隊のハルキもいた。彼は足に軽傷を負ったが、仲間と一緒に何十キロかを走って逃げたという。

一連の出来事から数日後、レガンヌから何人かの兵隊を乗せた一台のジープがやって来た。車は全速力でボルジ（Bordi：当地風の城塞。この話の当時は、フランス当局に接收されて郡役所と駐留軍基地を兼ねていた）の門を通り抜けた。乗っている兵隊たちは怒り心頭といった顔をしていた。私は、その時ちょうど、商店から 25 キロの小麦の袋を肩に担いで出て来たところだった。車は私の傍を走り抜け、私は驚いて飛び退いたが、その拍子に小麦の袋を地面に落としてしまった。ジープがそれを轆き、袋は二つに破れた。一人の士官が車から降りてくると私の方に近づいてきた。私に何か言う間を与えず、士官は手にしていた棍棒で私の目の上あたりを打ち付け、言った。

「今朝俺が中庭でハルキどもをどやし付けている時、お前は、事務所の前に売春婦みたいなポーズで突っ立って、こっちをじろじろ見てただろう！」

私の態度の何がいけなかったと言うのか。いずれにしても、こんな時は不用意に何か言わない方がいい。軍人たちがこんなに殺気立っている時は、なにかのはずみで逮捕されて、二度と日の目を見れないなんてことにもなり兼ねないからだ。